

もっと広がってほしいヘルプマーク

高丘中学校 一年 堀 ほり 海晴 かいせい

僕は「一型糖尿病」という持病があります。五歳の時に突然発症しました。その時はまだ小さかったので、入院中に注射を打ったりするのがいやで泣いたりしました。

その時にお父さん、お母さんだけでなく、おじいちゃん、おばあちゃん、おばさんたちが僕の病気のことをいろいろと調べてくれて「希望のバッグ」をもらいました。僕と同じ病気の子たちが頑張っているDVDや、測定器を入れるポーチなどが入っていました。中でも「私は一型糖尿病です」と書かれているキーホルダーもありました。

僕は、普段はみんなと同じように過ごすことができますが、たまに調子が悪い時があります。それが、もし一人で電車に乗っているときだったらどうでしょう？このキーホルダーがあることで周りの人たちに知らせることができます。

少し前、電車に乗っている時に僕と同じような赤いキーホルダーを付けている人を見かけました。それを調べると「へ

ルプマーク」というものでした。

一見何も障害などあるように見えない人でも、何らかの障害があるため優先座席を利用したり、災害時に手助けが必要だったり、いろいろな理由により付けられているのがヘルプマークだそうです。ヘルプマークの裏は、どのような病気でどうして欲しいのかを記入できるようになっています。僕はそれを知って「なるほどな。」と、思いました。このヘルプマークは十年前に一部の町で考えられたものだそうです。世の中には、そのように見た目では分からない障害や持病のある人がたくさんいて、それを理解されずに嫌な思いをしてきたことがあったかもしれません。

僕は、小学校や中学校、野球チームでは、入る時に持病があることをみんなに伝えてきたため特に嫌な思いをすることがなかったです。それは自分のことを周りが理解してくれていたからで、これから大きくなっていく中で自分の行動が誤解されることがあるかもしれません。

僕が試合や練習試合で行く野球場では、階段だけでなく舗装もされていないようなデコボコしたようなところがすご

く多いです。「このような所には車いすのひいおばあちゃんに応援に来てもらうのは無理だな。」と、思うことがあります。今まではなんとなく「体が不自由な人たちにも住みやすい所が増えてほしい。」と、思っていました。ヘルプマークの存在を知ったことで「いろんな人に優しい町や社会」になっけていけないと思いました。

今の僕にできることはそんなに多くないけど、自分が動けなくなるほどしんどくなった時どうしてもらえたらうれしいのかなどを考え、ヘルプマークを付けている人だけにではなく、困ってそうな人には勇気を出して声をかけるなど、行動できるようにしていきたいです。